

封建君主と仏教

—信長と切支丹宗・家康と浄土宗との類型の対比において—

平 祐 史

戦国の群雄を従属して集権的封建体制の君主として天下に臨うとする封建君主の宗教保護政策が何に基くかと云う一側面が次の物語によつて、うかがい知ることが出来る。

天正六年十一月高山右近敵ニ組シテ信長ノ命ニ応セス信長南蛮寺ノウルカン破天連ヲ召寄セテ菅谷九右衛門ヲ以テ仰テ曰ク抑天帝新宗ハ我命ヲ以テ広ク弘通スルコトヲ得タリ然ハ新宗ノ門徒我ニ対シテハ身命ヲ捨テモ奉公スヘキ所ニ高山右近ハ深ク天帝宗ヲ崇敬スト聞ニ今切テ我ニ背テ敵ニ与ス天帝ハ天地ノ始ニシテ正直ヲ以テ法ノ本トスト雖モ荒木村重力不忠ニ与スルノ条正直ノ門徒ニ非ス急ギ高山右近不義ヲ翻シテ味方ニ来ル様ニ致スベシ左ナカラニ於テハ忽新宗破却シ絶法スヘシト大ニ怒テ仰ケレバウルカン甚タ懼人急キ高山右近ヲ勸テ信長へ従属セ令ム是等ノ故ヲ以テ信長速ニ新宗破却ノ沙汰ニモ及レス（「南蛮寺興廢記」註一傍点筆者）

此の物語は信長の切支丹宗保護に関する根本的な態度であつて、外来新宗切支丹保護のかけにその教理神学に何を要求していたかが思い当るのである。封建体制の最後の仕上げ者家康に於いても、

或る高僧家康に向い足下は天台の論議をきき、浄土のもきき、禅宗の法語をも聞かる。かくて御成仏覚束なるべしといえるに、家康の答ふらく、我一人の成仏を願はんには、ともか

くもあれ天下萬民を掌る身分としては詮なし。(「駿河土産」註―傍点筆者)

と云い、封建君主としての宗教に対する面目を物語る好例であると思われる。

以上挙げた二人の集権的封建体制を促進しようとした君主の宗教への関心は総じて単に宗教への帰依乃至信仰への情熱だけに止まらず政治的意味に於いて宗教への関心が寄せられていたと理解してよいのではなからうか。

封建体制を保持する基礎的精神は封建君主に対する絶対忠誠と従属に外ならない。従つて封建君主は常に従者に対して、忠誠と服従奉公を強要し、従者が君主に対して、絶対の忠誠と奉公を誓うことが、封建社会にあつて最高の道徳とされ君主の命に殉ずることは最高の美徳でもあつた。此の様な封建倫理乃至神学を、打ち建てる必要は封建社会創業の途上にある君主にとつては、急務であり、封建制擁護に欠くべからざる精神的要素であつたと云える。

そこでもう一度信長の切支丹宗保護の立場を切支丹宗のもつ教義の那邊が信長の求めようとする思想と共通の場を得たかと云うことにふれて見よう。

寛永年間の切支丹禁教迫害に伴う殉教の覚悟を教える伝道文書「マルチリヨの勧め」の中に茲に能く心を留めて觀ぜよ。彼者は苦患の堪へ難きにより、ころびたるさへ、忽天罰を蒙りたるに、何たる苦みをも受けずして、只辭の風に恐れてころぶ者は、如何ばかりの恐しき科となるべきや。彼者は色身の命を惜みてころびたるさへ、勿ち御罰を与へ玉ふに、わずかなる財宝に眼を掛けてころぶ者は、如何あらんや。……(中略)…… 喩は、もののふ戰場にて臆病をかまへ、あまつさへ大将のはた下をにげ去り、敵に興みするに於ては、主君に

対する逆心甚深しと云うまじくや。其上他人をも其逆心に勧め入れんとせば、猶以て重罪たるべし。此の如きの者は、主人を始めとして、上下萬民に憎みうとまるべきこと道理たるべし。其の如く、キリシタンの上に妨ある時デウスに對し奉て天狗の巧む処を思案すれば、即ち弓箭の手柄に同じ、ヒーデスの戦い出来る時心に引かれ、亦是利欲にふけりて、ころぶ者は即ちゼブスの貴き苦留子の御はた下を遁去り、天狗に心を合する者なり。(註傍点筆者)と此の伝道文書に見られる様に切支丹宗の教は、宇宙一切の造物主であるデウス(天帝)の救済を信ずると共に救済されんとする為には天帝に對し絶対に服従し、奉公の誠を捧げねばならない。若し此れに背くときには、「御罰猶々稠しと見るべし。安留ニヨころびたる者を嫌ひ玉ふこと浅からず、辭を懸け玉はぬことは云うに及ばず、路次にて行逢い玉うに、面をそば向て通り玉う(「前掲書」と云う未来永劫に亘つて最大の苦罰を受けねばならないとした。

然して、天帝への忠誠、服従はそのまま地上の君主への絶対忠誠服従の精神を惹き起さしめかねて封建神学を要望する信長にとつて絶好の教えであつたにちがいない。如上の切支丹宗の教義の大要から「南蛮寺興廢記」に物語られる信長の切支丹に對する心の場とも云うべきものが略々理解出来るであらうし、更に此の様な類型を仏教側に求め替えて見たい。

広大な寺領と武力を擁して、俗的領主に對抗して来た中世寺院の勢力に對し、各々の封建領主は武力による徹底的な弾圧、或は政治的權威の統制下に組みしかんと意を用いた。「天下萬民を掌る身分としては詮なし」と、覲じた家康の仏教に對する態度はそのまま徳川幕府の屹然たる宗教政策の態度と見てよい。

慶長六年から、元和年間に至つて完成された寺院法度の制定が仏教教団を完全に幕藩体制下に組み込んでしまつた。かかる機運に応じて仏教は時代に即応せんとする教説を掲げ俗的權力に追従しようとする傾向が見られるに至つた。特に浄土宗に於いても、源誓存応等が早くから家康と關係を保ち、追従していることに氣付く「浄宗護国篇」はその關係を雄弁に物語るものであつて、「武州緑山増上寺中興勅賜普光觀智国師源誓大和尚伝」中

曰公姓松平松也閱歷千歲而不枯死施之大廈有棟梁之用四時菴菴能冒雪霜有君子之操受大夫之封是以世為瑞物祝比壽考其字也從木公声細分之則是十八公也而阿彌陀仏六八本願之中以第十八褒称願王何者釈迦勸讚諸仏舒於三世如來十方仏刹之中阿彌陀仏特檀超世之美者以發此願之故也亦夫人臣有大功則授公封王然則十八願王興十八公其言同類公姓十八公而資治國之法乎十八公願王能如阿彌陀仏悲深願広雖曰逆惡之者而不捨一称一念之功遠枉神足來迎病床汚穢之間攝取安養報利者名実符合生仏一体可謂松氏之治即是彌陀之益彌陀之化即是松氏之任矣録是說之非淨教有大因緣干松氏乎抑又非公壽算永久遂安靖天下之休祥乎經曰天下和順日月清明風雨以時災厲不起國豊民安兵才無用崇德興仁務修豊讓此淨教護持國家之聖証也（浄宗護国篇）と、又同書の序に

或曰般若護國也吾聞有其明拋矣未聞念仏之護國也其示有所所憑乎日有之經曰天下和順日月清明風雨以時災厲不起國豊民安等斯豈非念仏護國之聖証耶矧子所謂般若者吾所謂阿彌陀仏名号所具之一徳哉

などを、述べている様に政治的權力者称讃の具に浄土宗義を改作し云はば還俗して封建君主擁護の神学たらんと試み、時代に即応せんとする仏教の一側面と見てよいであらう。

総じて封建君主の宗教に対する関心は封建体制擁護促進の爲の一媒介と観じていたと云つて過言でない。封建体制擁護にはその精神生活の背骨として封建神学の要求が必然的におこるものであつて、特にその神学が宗教に求められる時宗教の信仰と、封建君主に対する忠誠奉公とが並行して相い交わらざるものであつては、成立しない。むしろ宗教の絶対者に対する信仰と封建君主に対する奉公が同一線上に於いて、行われる時に於いてこそ封建神学として、成立するものであると考えられる。従つて封建君主の地位は宗教に支配されずに宗教的絶対者或は造物主と同格乃至それ以上の権力者と、自からもつて任じていたと云つて過言ではなからう。

かゝる意味に於て、仏教の信仰生活はそのまゝ封建君主への奉公となり忠誠となつて、働くものであると云うことが出来る。こうした所に近世封建社会を通じて仏教の奉仕した道が自ずから、理解出来るのではなからうか。